「新古今集詞連歌」　翻刻と紹介

小山順子
竹島一希

室町時代後期、ある特定の古典作品を典拠とする詞を賦物として用いた百韻連歌が詠まれている。現存する作品数は決して多くはなく、また、正風連歌を重視する立場からすると、異例・異体と呼ばれるこれらの連歌作品は、研究の俎上に載せられることもほとんど無い。安達敬子氏が『源氏世界の文学』（平17・清文堂出版）所収の「室町連歌における原典の受容――「源氏詞連歌」二種――」において、『源氏物語』から取った詞を賦物に用いた二種の百韻連歌について注釈・考察を加えているのが、この種の百韻連歌に関する研究として管見に入るものである。

但し、古典作品の詞を賦物とする連歌（以下、詞連歌と通称）には、『源氏物語』を典拠とするもの以外にも様々な種類がある。これらの詞連歌は室町時代後期の古典への関心と連歌作品との関わり、また、連歌における本歌・本説取りとの関連を考える上で、興味深い資料である。今後、一連の詞連歌作品を整理し、その歴史を通覧したいと考えており、今回はその一つとして、大永三（一五二三）年三月十八日に張行された「新古今集詞連歌」を翻刻し紹介する。今号では、本文の翻刻と、百韻に賦物として用いられた『新古今集』の典拠となる和歌の指摘にとどまったが、次号に具体的な検討と考察を掲載する。

〈書誌〉

【底本】

・国立国会図書館蔵『連歌合集』（わ911・2―11）第二十九冊所収。国立国会図書館蔵マイクロ資料（YD1―110）による。内題「新古今集詞連歌」。近世中期写。

〈翻刻〉

【凡例】

・漢字は通行の字体で統一する。

・本文に見られる傍線は、新古今集詞に該当する詞を明示するものである。初めと終わりを正確に示すものでは必ずしもないと思われるが、翻刻では原本に忠実に付すこととする。

・丁移りはカギ括弧で示した。

【本文】

（初オ）

大永三年三月十八日

新古今集詞連歌

1 花にあけて嶺にわかるゝ雲もなし　鷲尾中納言

2 春のよひと夜かすみ来し月

3 かへる雁いまはの声もなごりにて　冷泉前中納言

4 舟のあとふきをくる浪かぜ　民部卿

5 旅の空都へいざとさそへかし　親王御方

6 わするばかりにとをきわがかた　甘露寺中納言

7 暮ゝより霧たちのぼる山たかみ　帥大納言

8 木ずゑまばらに秋ぞ成ゆく　右大弁宰相」

（初ウ）

9 菊もはやまだみぬ人にうつろひて　範久

10 霜をく月のよぞふけにける　重親朝臣

11 しばしとてうちふすほどは埋火に

12 我おもふどちむかしかたらむ　親王御方

13 まじはるにしられずしらぬ中はうし　右大弁宰相

14 こゝろやすくもうちはとけずや

15 つれなきは此世ながらのむくひかは　民部卿

16 やすらひかねてなげく夕暮　甘露寺

17 六の道にかへすゞ〳〵もめぐるらん

18 かりのやどりをいづる小車　帥大納言

19 松の戸にたえゞ〳〵苔の跡みえて　民部卿

20 よはにあやうき橋ぞふりたる　親王御方

21 岩まとおし氷もふむにとけぬらん　冷泉前中納言

22 かすみてとをき水の水かみ　鷲尾中納言」

（二オ）

23 鳥かへる雲に嵐の吹たえて　甘露寺中納言

24 おのへのかねののこるさびしさ　重親朝臣
25 松一木しぐれにぬれぬやどりかせ　帥大納言
26 まさの葉かづらちりまがふころ
27 そことなくよものかたより秋更て
28 草のいほりのころもうつ声　鷲尾中納言
29 ふる里の露よりなれし旅の袖　甘露寺
30 月にとゞめてみゆるおもかげ
31 わするなとちぎりをきしもいつならん　冷泉前中納言
32 人のとはぬも年ぞへにける　民部卿
33 恋よさてたが猶ざりにものおもひ　右大弁宰相
34 なにそはいのち暮をまつべき　重親朝臣
35 をきいづるけさの明ぼのあかずみて　帥大納言
36 さみれはるゝ雲の涼しさ　冷泉前中納言」

（二ウ）

37 立よれば杜のしづくに時鳥
38 野にも山にもゆきやらぬ道　範久朝臣
39 かくれ家は人こさせじと戸を閉て　冷泉前中納言
40 ふりにし里になりてあれぬる　民部卿
41 雪や今あまりなるまでつもるらむ　親王御方
42 ひと葉なりともものこれ草がれ
43 ときはにて杉のむらだち陰ふかみ　民部卿
44 あはれしるらむ鳥のこゑ〳〵　帥大納言
45 小鷹がり日も夕暮のかへるさに　鷲尾中納言
46 ことのほかなる袖の秋かぜ　冷泉前中納言
47 雲霧の波にはなるゝ末晴て　甘露寺中納言
48 かぎりやいかにわたつ海の底
49 ふかきをもたとへば人の心かも　親王御方
50 山のあなたにすむやたれなる　民部卿」

（三オ）

51 行めぐるふもとの道ははるかなり　冷泉前中納言
52 また風まぜに雪きほふそら　範久朝臣
53 さむき日はあし火たくやに立よりて　親王御方
54 いかにほせばか袖のひがたき
55 偽に人だのめなるよひ過ぬ　民部卿
56 ぬるともなしにいも夢にみゆ　帥大納言
57 草まくらこゝろも月をやつすらん
58 山のあき風いとゞはげしき　右大弁宰相
59 青柳のかづらもちれば露かけて　民部卿
60 こゝら玉ゐし波のみだれ藻　重親
61 道のべのほたる飛かふ夕川に
62 たれかはとはん名も宇治のさと　甘露寺中納言
63 いひたえてさてさはいかに身の向後　右大弁宰相
64 しのびはつべきおもひとはなし　親王御方」

（三ウ）

65 いにしへも恋せざりけむならひかは　帥大納言
66 世をへて冨士のけぶりをもみよ　冷泉前中納言
67 松嶋やをじまは月の秋ぞかし　重親
68 とまやは露のもりあかしつゝ　親王御方
69 すさまじくねぬ夜の床に雨きゝて　範久朝臣
70 かならず荻に風もやどるか
71 音しても人はこたへずおぼつかな
72 ほどもへにけり忘られしより　民部卿
73 うらみわびまたじといへば絶はてゝ　冷泉前中納言
74 さもあやにくに又したはばや　親王御方
75 ふむもおし八重散しける花のかげ　民部卿
76 かすみみだれてなびくはるかぜ　甘露寺中納言
77 永日に酔なすゝめそ此あそび
78 くるれば人のかへりもぞする
（名オ）
79 あさぢふに手枕なるゝむしの声　右大弁宰相
80 かくもさびしき秋はいかなる　冷泉前中納言
81 しらずたゞ袖に玉ちる露涙　甘露寺中納言
82 ぬれつゝきませこの雨の中　民部卿
83 うらみばやうときも人はおりなるに　範久
84 空もたよりのたそかれのほど
85 法の道入逢のかねにこと問て　鷲尾中納言
86 すむかげふかき山のかけはし　甘露寺中納言
87 柴の庵しばしとてこそむすびけれ　民部卿
88 みるもはかなの夢のたゞぢや　冷泉中納言
89 風かよふあたりの小篠うちそよぎ　右大弁宰相
90 ひろふあられは手にもたまらず　親王御方
91 うす雪や又雲わけて晴ぬらん
92 かり人こゆるやまの下道　帥大納言」
（名ウ）
93 谷せばみふかくも鹿のかくろひて　鷲尾中納言
94 かすみにおつるかりもきにけり　民部卿
95 くもるよも光にあまる月のかげ　右大弁宰相
96 庭をさかりとはなぞなり行
97 春にいま色なき人のあらじかし　親王御方
98 小田のかはづの声のあはれさ　冷泉前中納言
99 暮ゝ日のおぼろにみゆる山かげに　甘露寺
100 千世をば君とちぎるくれ竹　帥大納言

御製十九句　甘露寺中納言　十
親王御方　十一　右大弁宰相　八
民部卿　十四　重親朝臣　五
帥大納言　十　範久　五
冷泉前中納言　十二

鷲尾中納言　六」

〈校異〉

20あやうき―あやなき（異）　26まさ―まき（陽）　89そよき―裁き（陽）　99日の―日も（陽）

【対校本】

・陽…陽明文庫蔵『古連歌異躰』（近／二四三／九九）所収本。大和綴一帖。縦一五・〇cm、横二一・四cm。本文料紙は楮紙。表紙は本文と共紙、左肩に外題「古連歌異躰」。十九種の異体連歌百韻を収める。近世中期写。なお、虫損・破損が甚だしく、判読できない箇所も多い。

・異…京都大学文学部国語学国文学研究室蔵『異例連歌』（国文／Gl／4）所収本。袋綴一冊。縦二三・六cm、横一六・五cm。白地に茶で縦引きの紙表紙の左肩に題簽、外題「異例連謌」。本文料紙は楮紙。近世後期写。但し、初折のみの抜書。

〈連衆〉

御製―後柏原天皇。当時六十歳。

親王御方―知仁親王（後の後奈良天皇）。当時二十八歳。

民部卿―甘露寺元長。当時、正二位権大納言、民部卿、六十八歳。

帥大納言―三条西公条。当時、従二位権大納言、太宰権帥、三十七歳。

冷泉前中納言―冷泉永宣、当時六十歳。もしくは、下冷泉為隆、当時四十九歳。

鷲尾中納言―鷲尾隆康。当時、従二位権中納言、三十九歳。

甘露寺中納言―甘露寺伊長。当時、正三位権中納言、四十歳。

右大弁宰相―万里小路秀房。当時、従三位参議、右大弁、三十二歳。

重親朝臣―庭田重親。当時、二十九歳。

範久―高倉範久。当時、三十一歳。

〈新古今集詞の典拠〉

【凡例】

・掲出した本文は、陽明文庫本・異例連歌を参照して校訂したものである。

・典拠として掲出した『新古今集』本文・和歌番号は、新日本古典文学大系11『新古今和歌集』（平4・岩波書店）による。（部立・歌番号・作者）の順で示した。また、歌

本文は、読みやすさを考慮して、適宜漢字に改め、踊り字は開いた。

・句とその本歌とを比較して、底本で引かれている傍線が本歌から摂取された部分の指摘として不十分であると判断された場合、傍線を伸ばした。また、本歌と重なる素材を破線で示した。

・作者名が記されていない句は、全て御製と判断し、改めて明示した。

1　花にあけて嶺にわかるゝ雲もなし　鷲尾中納言
春の夜の夢の浮橋とだえして峰に分るる横雲の空
（春上・三八・藤原定家）
あひ見ても峰に分るる白雲のかかるこの世の厭はしきかな
（釈教・一九五八・源季広）

2　春のよひと夜かすみ来し月　御製
今朝はしも嘆きもすらむいたづらに春の夜一夜夢をだに見で
（恋三・一一七八・和泉式部）

3　かへる雁いまはの声もなごりにて　冷泉前中納言
帰る雁今はの心ありあけに月と花との名こそ惜しけれ
（春上・六二・藤原良経）

4　舟のあとふきをくる浪かぜ　民部卿
明けぬとて野辺より山に入る鹿のあと吹き送る萩の下風
（秋上・三五一・源通光）

5　旅の空都へいざとさそへかし　親王御方
あしびきのこなたかなたに道はあれど都へいざと言ふ人ぞなき
（雑下・一六九〇・菅原道真）

6　わするばかりにとをきわがかた　甘露寺中納言
手もたゆくならす扇の置き所忘るばかりに秋風ぞ吹く
（秋上・三〇九・相模）
身に添へるその面影も消えななむ夢なりけりと忘るばかりに
（恋二・一一二六・藤原良経）

7　暮ゝより霧たちのぼる山たかみ　帥大納言
村雨の露もまだ干ぬ真木の葉に霧立ち上る秋の夕暮
（秋下・四九一・寂蓮）

8　木ずゑまばらに秋ぞ成ゆく　右大弁宰相
立田山梢まばらになるままに深くも鹿のそよぐなるかな

（秋下・四五一・俊恵）

9　菊もはやまだみぬ人にうつろひて　範久
春雨はいたくな降りそ桜花まだ見ぬ人に散らまくも惜し
（春下・一一〇・山辺赤人）

10　霜をく月のよぞふけにける　重親朝臣
鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける
（冬・六二〇・大伴家持）

11　しばしとてうちふすほどは埋火に　御製
かきやりしその黒髪の筋ごとに打ち伏すほどは面影ぞ立つ
（恋五・一三九〇・藤原定家）

12　我おもふどちむかしかたらむ　親王御方
山里にうき世厭はむ友もがな悔しく過ぎし昔語らむ
（雑中・一六五九・西行）

13　まじはるにしられずしらぬ中はうし　右大弁宰相
疎くなる人を何とて恨むらむ知られず知らぬ折もありしに
（恋四・一二九七・西行）

14　こゝろやすくもうちはとけずや　御製
蘆の屋のしづはた帯の片結び心やすくも打ち解くるかな
（恋三・一一六四・源俊頼）

15　つれなきは此世ながらのむくひかは　民部卿
嘆かじな思へば人につらかりしこの世ながらの報ひなりけり
（恋五・一四〇一・皇嘉門院尾張）

16　やすらひかねてなげく夕暮　甘露寺
秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな
（恋三・一一六九・敦道親王）

17　六の道にかへすゞ〳〵もめぐるらん　御製
我が頼む七の社の木綿だすきかけても六の道にかへすな
（神祇・一九〇二・慈円）

18　かりのやどりをいづる小車　帥大納言
世中を厭ふまでこそ難からめ仮の宿りを惜しむ君かな
（羇旅・九七八・西行）

19　松の戸にたえゞ〳〵苔の跡みえて　民部卿
山深み春とも知らぬ松の戸に絶え絶えかかる雪の玉水

（春上・三・式子内親王）

20 よはにあやうき橋ぞふりたる　親王御方
不明

21 岩まとぢし氷もふむにとけぬらん　冷泉前中納言
岩間閉ぢし氷も今朝は解け初めて苔の下水道もとむらむ
（春上・七・西行）

22 かすみてとをき水の水かみ　鷲尾中納言
年経たる宇治の橋守言問はむ幾代になりぬ水の水上
（賀・七四三・藤原清輔）

23 鳥かへる雲に嵐の吹たえて　甘露寺中納言
移り行く雲に嵐の声すなり散るかまさ木の葛城の山
（冬・五六一・飛鳥井雅経）

24 おのへのかねののこるさびしさ　御製
年も経ぬ祈る契りは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮
（恋二・一一四二・藤原定家）

25 松一木しぐれにぬれぬやどりかせ　重親朝臣
心とや紅葉はすらむ立田山松は時雨に濡れぬものかは
（秋下・五二七・藤原俊成）

26 まさの葉かづらちりまがふころ　帥大納言
松に這ふまさの葉かづら散りにけり外山の秋は風すさぶらむ
（秋下・五三八・西行）

（注）底本・陽ともにこの句には、新古今集詞を指摘する傍線が欠落しているが、「まさの葉かづらちり」の部分を新古今集詞と判断した。

27 そことなくよものかたより秋更て　御製
浦にたく藻塩の煙靡かめや四方の方より風は吹くとも
（恋五・一三六一・読人不知）

28 草のいほりのころもうつ声　鷲尾中納言
昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山時鳥
（夏・二〇一・藤原俊成）

29 ふる里の露よりなれし旅の袖　甘露寺
霜氷る袖にも影は残りけり露よりなれし有明の月
（冬・五九四・源通具）

30　月にとゞめてみゆるおもかげ　御製
面影の忘らるまじき別れかな名残を人の月に留めて
（恋三・一一八五・西行）

31　わするなとちぎりをきしもいつならん　冷泉前中納言
忘れじと契りて出でし面影は見ゆらむものを故郷の月
（羇旅・九四一・藤原良経）

32　人のとはぬも年ぞへにける　民部卿
ならはねば人の訪はぬもつらからで悔しきにこそ袖は濡れけれ
（恋五・一四〇〇・平教盛母）

33　恋よさてたが猶ざりにものおもひ　右大弁宰相
春ごとに心をしむる花の枝に誰がなほざりの袖か触れつる
（春上・四九・大弐三位）

34　なにそはいのち暮をまつべき　重親朝臣
これも又ながき別れになりやせむ暮を待つべき命ならねば
（恋三・一一九二・藤原知家）

35　をきいづるけさの明ぼのあかずみて　帥大納言
幾千代と限らぬ君が御代なれど猶惜しまるる今朝の曙
（雑上・一四八八・藤原家通）

36　さみだれはるゝ雲の涼しさ　冷泉前中納言
棟咲く外面の木陰露落ちて五月雨晴るる風渡るなり
（夏・二三四・藤原忠良）

37　立よれば杜のしづくに時鳥　御製
時鳥声待つほどは片岡の森の雫に立ちや濡れまし
（夏・一九一・紫式部）

38　野にも山にもゆきやらぬ道　範久朝臣
ながめ侘びぬ秋よりほかの宿もがな野にも山にも月やすむらむ
（秋上・三八〇・式子内親王）
おぼつかな野にも山にもしら露の何ごとをかは思ひ置くらむ
（秋下・四六五・村上天皇）

39　かくれ家は人こさせじと戸を閉て　冷泉前中納言
山里は人来させじと思はねど訪はるることぞ疎くなり行く
（雑中・一六六〇・西行）

40　ふりにし里になりてあれぬる　民部卿
み吉野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は来にけり

（春上・一・藤原良経）

41　雪や今あまりなるまでつもるらむ　親王御方
五月雨は真屋の軒端の雨そそきあまりなるまで濡るる袖かな
（雑上・一四九二・藤原俊成）

42　ひと葉なりとものこれ草がれ　御製
浮草の一葉なりとも礒隠れ思ひなかけそ沖つ白波
（釈教・一九六二・寂然）

43　ときはにて杉のむらだち陰ふかみ　民部卿
山深み杉のむら立ち見えぬまで尾上の風に花の散るかな
（春下・一二二一・源経信）
聞かずともここをせにせむ時鳥山田の原の杉のむら立ち
（夏・二一七・西行）

44　あはれしるらむ鳥のこゑ〳〵　帥大納言
誰住みてあはれ知るらむ山里の雨降りすさむ夕暮の空
（雑中・一六四二・西行）

45　小鷹がり日も夕暮のかへるさに　鷲尾中納言
おのづから涼しくもあるか夏衣日も夕暮の雨の名残に
（夏・二六四・藤原清輔）
いづくにか今宵は宿をかり衣日も夕暮の峰の嵐に
（羇旅・九五二・藤原定家）

46　ことのほかなる袖の秋かぜ　冷泉前中納言
山里は世の憂きよりは住み侘びぬことのほかなる峰の嵐に
（雑中・一六二三・宜秋門院丹後）

47　雲霧の波にはなるゝ末晴て　甘露寺中納言
霞立つ末の松山ほのぼのと波に離るる横雲の空
（春上・三七・藤原家隆）

48　かぎりやいかにわたつ海の底　御製
流木と立つ白波と焼く塩といづれか辛きわたつ海の底
（雑下・一七〇一・菅原道真）

49　ふかきをもたとへば人の心かも　親王御方
ただ頼めたとへば人の偽りを重ねてこそは又も恨みめ
（恋三・一二二三・慈円）

50　山のあなたにすむやたれなる　民部卿
あしびきの山のあなたに住む人は待たでや秋の月を見る

らむ　（秋上・三八二・三条院）

51　行めぐるふもとの道はるかなり　冷泉前中納言
待つ人の麓の道は絶えぬらむ軒端の杉に雪重るなり
（冬・六七二・藤原定家）

52　また風まぜに雪きほふそら　範久朝臣
風まぜに雪は降りつつしかすがに霞たなびき春は来にけり
（春上・八・読人不知）

53　さむき日はあし火たくやに立よりて　親王御方
難波人蘆火たく屋に宿借りてすずろに袖のしほたるるかな
（羇旅・九七三・藤原俊成）

54　いかにほせばか袖のひがたき　御製
河社しのにをりはへ干す衣いかに干せばか七日干ざらむ
（神祇・一九一五・紀貫之）

55　偽に人だのめなるよひ過ぬ　民部卿
有明の月待つ宿の袖の上に人頼めなる宵の稲妻
（秋上・三七六・藤原家隆）

56　ぬるともなしにいも夢にみゆ　帥大納言
世中は憂きふししげし篠原や旅にしあれば妹夢に見ゆ
（羇旅・九七六・藤原俊成）

57　草まくらこゝろも月をやつすらん　御製
隈もなき折しも人を思ひ出でて心と月をやつしつるかな
（恋四・一二六八・西行）

58　山のあき風いとゞはげしき　右大弁宰相
み吉野の山の秋風小夜ふけて故郷寒く衣打つなり
（秋下・四八三・飛鳥井雅経）
飛鳥川紅葉葉流る葛城の山の秋風吹きぞしくらし
（秋下・五四一・柿本人麻呂）

59　青柳のかづらもちれば露かけて　民部卿
白雲の絶え間に靡く青柳の葛城山に春風ぞ吹く
（春上・七四・飛鳥井雅経）

60　こゝら玉ぬし波のみだれ藻　重親
草の上にここら玉ぬし白露を下葉の霜と結ぶ冬かな
（冬・六一九・曽祢好忠）

61　道のべのほたる飛かふ夕川に　御製
道の辺の螢ばかりをしるべにて一人ぞ出づる夕闇の空
（釈教・一九五一・寂然）

62　たれかはとはん名も宇治のさと　甘露寺中納言
明日よりは志賀の花園まれにだに誰かは訪はむ春の故郷
（春下・一七四・藤原良経）

63　いひたえてさてさはいかに身の向後　右大弁宰相
おろかなる心の引くにまかせてもさてさはいかにつひの思ひは
（雑下・一七四九・西行）

64　しのびはつべきおもひとはなし　親王御方
思へども言はで月日はすぎの門さすがにいかが忍び果つべき
（恋二・一一〇九・藤原忠定）

65　いにしへも恋せざりけむならひかは　御製
思ひ侘び見し面影はさておきて恋せざりけむ折ぞ恋しき
（恋五・一三九四・藤原俊成）

66　世をへて富士のけぶりをもみよ　帥大納言
しるしなき煙を雲にまがへつつ夜を経て富士の山と燃えなむ
（恋一・一〇〇八・紀貫之）

67　松嶋やをじまは月の秋ぞかし　冷泉前中納言
立ち帰り又も来て見む松島や雄島の苫屋波に荒らすな
（羇旅・九三三・藤原俊成）

68　とまやは露のもりあかしつゝ　重親
稲葉吹く風にまかせて住む庵は月ぞまことにもり明かしける
（秋上・四二八・俊成女）
秋の田に庵さす賤の苫を粗み月とともにやもり明かすらむ
（秋上・四三一・藤原顕輔）

69　すさまじくねぬ夜の床に雨きゝて　親王御方
忘れずはなれし袖もや氷るらむ寝ぬ夜の床の霜のさむしろ
（恋四・一二九一・藤原定家）

70　かならず荻に風もやどるか　範久朝臣
秋来ぬと松吹く風も知らせけり必ず荻の上葉ならねど
（秋上・三〇六・七条院権大夫）

71　音しても人はこたへずおぼつかな　御製
岡の辺の里の主を訪ぬれば人は答へず山風の風

（雑中・一六七五・慈円）

72　ほどもへにけり忘られしより　民部卿
我が身こそあらぬかとのみたどらるれ訪ふべき人に忘られしより
（恋五・一四〇五・小野小町）

73　うらみわびまたじといへば絶はてゝ　冷泉前中納言
恨み侘び待たじ今はの身なれども思ひなれにし夕暮の空
（恋四・一三〇二・寂蓮）

74　さもあやにくに又したはばや　親王御方
秋とだに忘れむと思ふ月影をさもあやにくに打つ衣かな
（秋下・四八〇・藤原定家）

75　ふむもおし八重散しける花のかげ　民部卿
木の下の苔の緑も見えぬまで八重散り敷ける山桜かな
（春下・一一三一・源師頼）

76　かすみみだれてなびくはるかぜ　甘露寺中納言
春風の霞吹きとく絶え間より乱れて靡く青柳の糸
（春上・七三・殷富門院大輔）

77　永日に酔なすゝめそ此あそび　御製
花のもと露の情けはほどもあらじ酔ひな勧めそ春の山風
（釈教・一九六四・寂然）

78　くるれば人のかへりもぞする　帥大納言
移ろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛の裏風
（雑下・一八二〇・赤染衛門）

79　あさぢふに手枕なるゝむしの声　右大弁宰相
秋の色は籬に疎くなり行けど手枕なるる閨の月影
（秋上・四三二・式子内親王）

80　かくもさびしき秋はいかなる　冷泉前中納言
おぼつかな秋はいかなるゆゑのあればすずろに物のかなしかるらむ
（秋上・三六七・西行）

81　しらずたゞ袖に玉ちる露涙　甘露寺中納言
幾夜我波にしほれて貴船川袖に玉散る物思ふらむ
（恋二・一一四一・藤原良経）

82　ぬれつゝきませこの雨の中　御製
秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜は更けぬ

とも　（秋上・三三三・柿本人麻呂）

83　うらみばやうときも人はおりなるに　民部卿
とめこかし梅盛りなる我が宿を疎きも人は折にこそよれ
（春上・五一・西行）

84　空もたよりのたそかれのほど　範久
年を経て思ふ心のしるしにぞ空もたよりの風は吹きける
（恋一・九九八・藤原高光）

85　法の道入逢のかねにこと問て　鷲尾中納言
山里の春の夕暮来て見れば入逢の鐘に花ぞ散りける
（春下・一一六・能因）

86　すむかげふかき山のかけはし　甘露寺中納言
白雲のたな引き渡るあしびきの山の梯今日や越えなむ
（羇旅・九〇六・紀貫之）
旅人の袖吹き返す秋風に夕日寂しき山の梯
（羇旅・九五三・藤原定家）

87　柴の庵しばしとてこそむすびけれ　民部卿
道の辺に清水流るる柳陰しばしとてこそ立ち止まりつれ
（夏・二六二・西行）

88　みるもはかなの夢のたゞぢや　冷泉前中納言
逢ふと見てことぞともなく明けぬなりはかなの夢の忘れ形見や
（恋五・一三八七・藤原家隆）

89　風かよふあたりの小篠うちそよぎ　右大弁宰相
岩井汲むあたりの小篠玉越えてかつがつ結ぶ秋の夕露
（夏・二八〇・藤原兼実）

90　ひろふあられは手にもたまらず　親王御方
須磨の海人の袖に吹き越す潮風のなるとはすれど手にもたまらず
（恋二・一一一七・藤原定家）

91　うす雪や又雲わけて晴ぬらん　御製
我頼む人いたづらになしはてば又雲分けて上るばかりぞ
（神祇・一八六一・賀茂明神）

92　かり人こゆるやまの下道　帥大納言
秋されば狩人越ゆる立田山立ちても居ても物をしぞ思ふ
（雑中・一六八八・柿本人麻呂）

93　谷せばみふかくも鹿のかくろひて　　鷲尾中納言
立田山梢まばらになるままに深くも鹿のそよぐなるかな
（秋下・四五一・俊恵）

94　かすみにおつるかりもきにけり　　民部卿
暮れて行く春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟
（春下・一六九・寂蓮）

95　くもるよも光にあまる月のかげ　　右大弁宰相
やはらぐる光に余る影なれや五十鈴河原の秋の夜の月
（神祇・一八八〇・慈円）

96　庭をさかりとはなぞなり行　　御製
今日だにも庭を盛りと移る花消えずはありとも雪かとも見よ
（春下・一三五・後鳥羽院）

97　春にいま色なき人のあらじかし　　親王御方
明石潟色なき人の袖を見よすずろに月も宿る物かは
（雑上・一五五八・藤原秀能）

98　小田のかはづの声のあはれさ　　冷泉前中納言
折にあへばこれもさすがにあはれなり小田の蛙の夕暮の声
（雑上・一四七七・藤原忠良）

99　暮ゝ日のおぼろにみゆる山かげに　　甘露寺
浅緑花も一つに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月
（春上・五六・菅原孝標女）

100　千世をば君とちぎるくれ竹　　帥大納言
今はとて妻木こるべき宿の松千代をば君と猶祈るかな
（雑中・一六三七・藤原俊成）

〔付記〕本稿は、平成一九年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である（竹島一希）。

（こやま　じゅんこ・天理大学専任講師）
（たけしま　かずき・本学博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）